庭園 協会ニュース 第90号

一般社団法人 日本庭園協会
東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/
編集者：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、加藤 精一、内田 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：平成 29 年 11 月 30 日

紅葉を始めた木々と、洞窟護岸を望む

「東日本大震災 復興記念庭園築庭」を終えて

菊地 正樹

未曾有の大震災から、ようやく復興の目処らしきものが見え始めた頃、（とはいえ沿岸部の遅々として進まぬ様は、筆舌に尽くしがたいものがあったのですが）何か我々も出来ることをしなくては、という思いに駆られ始まったこの築庭は、五年目を迎えてようやくひとつの完成を見ました。その過程については、写真や図の方が、皆様にはイメージしやすいかと思われるので、ここに掲載します。

ここは、奇しくも仙台藩主伊達政宗の流れを汲み、本家で跡継ぎがなかった際には、ここから仙台藩主を輩出したという宮床伊達家の墓所のある由緒ある寺院です。建物から奥に視線を移すと、境内からそのまま山に続き、大変閑静なところに見えます。記念庭園はその寺院と山の中間ともいえる場所に、その自然との調和や心が落ち着くような静けさを全く壊すことなく、築庭しました。

伝統的な技の継承と新しい技術の融合に心を砕いた温故知新の結晶であり、自然と人工的なものの融合を試みていながらも幽寂閑雅の体をなした庭にできあがりました。ぜひこの庭園を訪れ、鎮魂の祈りを捧げ、一時の心の安らぎを感じて欲しいと思います。

（副会長　宮城県支部長）

鑑賞研究部・東京都支部共催

平成29年7月9日

初夏日帰り庭園見学会
「武蔵野の育む庭いまむかし
―中央線沿線の庭園と会員作品を見る―」

藤枝　修子

国分寺崖線、武蔵野のハケなど、東京の特徴的な地域の庭を龍居名誉会長のご案内で見学しました。今回の見学会は、特に、若手の参加者を奨励するために参加費に配慮しました。また、4か所の見学先は公共の乗り物で移動は可能ですが、好天の初夏でもあり、ベテランと若手の交流がはかれるように小型バスを利用し、好評でした。

第1の見学先、大田黒公園（杉並区）に近い荻窪駅（JR中央線、地下鉄丸の内線）南口で集合しました。音楽評論家の大田黒元雄氏が生前から愛した回遊式和風庭園に芝生広場があり、その東南角に建つレンガ色洋風建築（記念館）には愛用のピアノなどが展示してありました。伊藤邦衛氏が設計、蛭田貫二氏が施工されたとのことですが、移管当時の杉並区担当者の状況なども龍居名誉会長から説明されました。今は、多彩な樹木、池に張り出した四阿（あずまや）、初夏の緑をぬって庭石の間を流れる水の音など、四季折々に楽しめそうな味わいのある空間でした。

オリジナルを含め石造品の数々が陳列されている

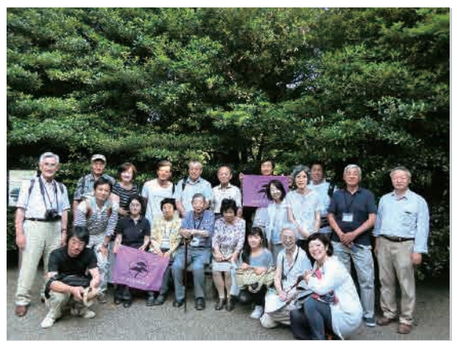
第2の見学先、石正園（西東京市）では、適宜昼食を済ませてから、広大な敷地内に膨大な石造物、雑木の庭作りの苗木類などが、見わたすばかり多量に植えてある圃場を拝見しました。代表者の平井孝幸さんは、所用のためお会いできませんでしたが、龍居名誉会長から、平井さんの人となり、恩師飯田十基とのこと、若者を連れての国内外の研修旅行の進め方、茶道にも極めて造詣が深く、雑木の庭作りは何冊もの著作で見ることができるなど、ご紹介がありました。庭をまわりながら、お弟子の守谷さんから、説明をいただきました。研修旅行の道々で作成したファイルの実物を拝見し、私達一同は、親方として、また教育者としての平井さんに触れることができて感動しました。そして、作庭者としての作法、エチケットなども私たちに訴えるものがありました。

石像の説明をする石正園の担当者。左は加藤精一東京都支部長

次いで、第3の見学先、滄浪泉園（東京都小金井市）は、大正時代に波多野承五郎の別荘でしたが、木堂こと犬養毅元首相が大正8年（1919）の命名、門標の筆とのことです。古い多摩川が西南方向に移動して、立川市北東から五島美術館のある世田谷区野毛まで段丘（国分寺崖線）の一部にあたり「はけ」と呼ばれています。園内の崖下の砂礫層から地下水が湧きでています（東京の名湧水57選）。この庭園も造園家の蛭田貫二氏が山の中の流れなので、石を少なめに、簡素につくったとの龍居名誉会長の説明でした。

最後に訪れた殿ヶ谷戸庭園（東京都国分寺市）は国指定名勝の東京都立庭園で、大正期はじめに三菱合資会社の江口定条氏が所有し、赤坂の庭師、仙石荘太郎が武蔵野の自然を生かした庭を作りました。昭和4年（1929）に三菱財閥の岩崎彦弥太が別荘として譲り受け、和洋折衷の回遊式林泉庭園、数寄屋風の茶室などが整備されました。今回は、殿ヶ谷戸庭園の黒崎明子センター長のご説明で和室から夕日に映える眺めも楽しむことができました。

（常務理事　鑑賞研究委員長）


初夏の一日、たっぷり見学をしました

第9回　庭園技術連続基礎講座の報告

庭屋一如というかけがえのない価値を再認識

及川　博文

連続講座（全5回）は、多彩な講師による座学と実地解説で構成され、常に新しい発見と学びのある充実した講座でありました。

講座ではテーマとなる「庭と建物」を多様な観点で採り上げ、数寄屋の「庭屋一如」の考えに基づいた茶室・露地の構成と設計手法や、四季と向き合う低気密高蓄熱住宅の設計原理、木造住宅の伝統技法などから、実務に有効な学びを多く得ました。

穏やかに語りかけるよう講演する上野周三氏

また、そうした手法が現代に求められる背景についても様々な角度で語られ、資源の枯渇や環境異変といった地球的な環境課題はもとより、現代人の自然観の変容についても、庭と建物の設計を通じ細やかな工夫を重ね、経済的で快適な暮らしを実現していく事が求められていると実感しました。

とくに講座で指摘された国内の森林荒廃の課題で、豪雨時に山崩れで流木が発生し災害の極大化を引き起こしている現状は、7月に発生した九州北部豪雨被害でも改めて立証する形となり、森林整備の緊急性と永続性ある森林資源の活用が必要である事を認識しました。

さらに、実地見学では理論や手法を確認できる様々な庭に身を置き、新宿御苑では庭園整備の史的変遷を基に苑内を巡りながら、点在する建造物と庭の構成を確認しました。

また、庭と建物に造詣の深かった作庭家：田中泰阿弥が作庭した瀬川邸では、瑞々しい苔庭を見学し、美材で構成された部屋が連なる重厚な家屋と庭の一体性を実感しつつ、田中泰阿弥が庭に注いだ独自の作庭理念やその人物像に共感を覚えました。

都内の限られた空間とは思えないような中村寛氏作庭の混ぜ垣

とりわけ印象的だった事は、龍居名誉会長の「庭は変わる。そして、後世の庭の顔は、後の人が決めるもの。決めるには植木屋が総合商社でなくてはならない」とのお話で、専門分業化の中、高い志と広い見識を求め弛まぬ研鑽を積む事の大切さを示した、私達への叱咤激励と受け止めました。時に市場経済の中では、庭は「外構」、建物は「物件」とも称され、庭と建物が別々に取り扱われる傾向にありますが、庭と建物の調和は、経済価値だけでは推し量れない、人が本来持つ自然観の深い部分に影響する重要な意味があると感じています。

今回の講座は希望者が多数だったと伺いましたが、受講者の方々の意識の高さ、事務局の皆様の熱意にも感化され、大変学び多い講座でした。今後は、受講で得られた学びをさらに高め実務の中に活かす努力をしていきたいと考えております。最後に本講座の企画運営に関わられた全ての皆様に感謝申し上げます。

（維持会員（株）MOAグリーン・サービス勤務）

広く前向きに、何でも吸収していきたい

神山　将大

今回、初めて庭園技術連続基礎講座に参加させていただきました。「建築と庭」というテーマのもと、午前中は座学で建築家・造園家の先生方

の講義、午後は講義してくださった先生が実際に造られたお庭や名園、非公開のお庭の実地見学でした。

作庭された先生方のこだわりなどを実際に拝聴・拝見することができた大変貴重な体験でした。毎回知らないことばかりで、とても勉強になりました。

1回目では、数寄屋建築と茶庭の密接な関係がわかりました。4回目の龍居竹之介先生は、これまでの豊かなご経験を交えての講義で、言葉に重みがありました。新宿御苑の講義では御苑の内容はもちろんですが、その他の公園についても、たくさんのお話がありました。午後の御苑内の見学では、自分ではまだまだ感じ取ることのできない庭園の見方・感じ方を伺い、豊富な知識と経験が無ければできないことだと思いました。5回目の田中泰阿弥氏についてのお話の中では、泰阿弥氏は庭師でありながら茶道や建築についても非常に詳しく、庭と一緒に茶室も造っていたと伺って驚きました。茶道や建築などの文化も、もっと広く深く勉強しなくてはいけないと思いました。

また、5回目の講座終了後の懇親会にも参加させていただき、これまでお話しすることのなかった方々とも交流することができ、楽しくためになる時間を過ごさせていただきました。

緑や水が道行く人の目を楽しませる落合悟氏作庭の店舗前

今回の講座に参加して、自分の知識の無さ、意識の低さを痛感しました。もっと勉強しなくてはいけない、名園を実際に見に行くことも大切だと思うことができました。このように自分も頑張らなくてはいけないと前向きになれたのは、参加した皆様の真剣に講義を聴きメモを取る姿勢や、まだまだ未熟な私のような学生でも、学ぶ気があれば温かく受け入れていただける雰囲気があったからこそだと思います。

専門学校生の私を参加者全員が優しく受け入れてくださり、学ぶ機会をいただけたことに大変感謝しています。この貴重な体験・内容をしっかりと心と体に刻み、広い視野を持って、何でも吸収し、卒業後に向けてこれからの学校生活を送っていきたいと思います。

またこのような講座がございましたら参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

（維持会員　テクノ・ホルティ園芸専門学校　学生）

新宿御苑で案内をしていただいた龍居名誉会長を囲んで記念撮影

●第1回　5月28日（日）
〈建物と庭・建築家〉
講演…上田 卓聖（建築家・藤森工務店）
〈建物と庭・造園家〉
講演…上野 周三（造園家・麻布 植祐）
〈庭園実地見学〉
「神通静玩堂　室内茶庭」（港区）
解説…上野 周三

●第2回　6月25日（日）
〈建物と庭・建築家〉〈建物と庭・造園家〉
対談…杉浦 干城（建築家・WHAT）×中村 寛（造園家・中村庭苑）
〈庭園実地見学〉
「飯島邸」（杉並区）解説…中村 寛

●第3回　7月30日（日）
〈建物と庭・建築家〉
講演…金田 正夫（建築家・無垢里一級建築士事務所）
〈建物と庭・造園家〉
講演…落合 悟（造園家・作庭処 落合）
〈庭園実地見学〉
「ぎゃらりー無垢里」（渋谷区）
解説…金田 正夫

●第4回　8月27日（日）
〈建物と庭・建築家〉〈建物と庭・造園家〉
「新宿御苑で見る建物と庭」
講演…龍居 竹之介
〈庭園実地見学〉
「新宿御苑」解説…龍居竹之介

●第5回　9月24日（日）
〈建物と庭・建築家〉〈建物と庭・造園家〉
「田中泰阿弥の庭と建物」
講演…三鍋 光夫（建築家）
〈庭園実地見学〉
「瀬川邸」（文京区）　解説…三鍋 光夫

平成29年度　伝統庭園技塾

東日本大震災復興記念庭園築庭

平成29年10月11日～15日
宮城県大和町　覚照寺

心新たに感じたこと

殿井 一宏

伝統庭園技塾に参加したことは、私にとって、とても学ぶことの多い経験でした。

私は、本州の最西端にある山口県下関市で、父を師とし、この仕事に就いて7年目を迎えます。木々と向き合うことは地球と向き合うこと、そういう思いで日々仕事に取り組んでいますが、毎日コツコツと目の前の仕事に向かっていると、どうしても視野が狭くなりがちです。だからこそ今回、仙台という遠い地で、全国から集結した同業の方々と一緒に作庭できたことは、閉鎖的になりがちだった自分の世界から目を覚ますきっかけになったのです。

石樋１段目の据付け作業

水鉢にピン穴をあける殿井塾生

背丈以上もある樹木を山採りしたこと、ベテラン職人さんの根巻き作業を見て、これまで自分が行ってきた方法とは違うやり方を知ることができたこと、地下支柱という初めての経験など、目にするものや作業するすべてが新鮮でした。

中でも一番刺激を受けたのは、夜にみんなで集まって語った内容です。「自然を造るために自然を学ぶ」という精神論から、今後の庭園業界はどうあるべきかなど、様々な議論が飛び交い、その夜は興奮して眠れなかったほど。まさに、これまでの自分は「木を見て森を見ず」であったという反省もあり、これからは、森を考えながら、木を見つめて仕事に取り組んでいこうと、心新たにしました。

また、今回は復興途上の被災地などを訪問する時間はとれなかったのですが、緑を植える自分の仕事が「誰かの生きる舞台にエネルギーを与える」ものであるということも、改めて誇りに感じ、身が引き締まりました。

石樋の玉掛けをはずす城至塾生

この場を借りて、このような機会を下さった廣瀬塾長をはじめ、関係者の方々に、心より感謝を申し上げます。この経験を活かし、故郷・下関に、そして、最終的には地球に、癒しと潤いを与えることができるよう、これからも勉強と経験を重ねていきたいと思います。

（会員子弟 山口県支部 関庭勤務）

5年間技塾に参加して

城至　快晴

私は、5年前の19歳の時に、宮城県で行われた伝統庭園技塾に参加させて頂きました。

覚照寺に着いてまず最初に思った事は、「どうやってこの場所に庭を造るのだろう?」でした。なぜならそこは「山の中」といった感じだっ

たからです。

しかし、1年目は延段の施工、2年目はロックフィル、滝組、3年目は山採り、植栽、土橋、4年目は洞窟岩組、石樋、護岸、5年目は水鉢・石樋の据え付け、と参加しているうちに庭が出来ていきました。その過程を目の当たりにし、あの場所がこんなに立派な庭になるなんて、すごいな、とその庭造りの過程と知識と技術に感動しました。

また今回の庭造りでは、石組や護岸造り、石樋造り、植栽など実家の造園業では体験できない様な作業を講師の方々に教わりながらする事ができ、貴重な体験をさせて頂きました。

他にも、勉強になった事があります。それは夜の食事の席で、講師の方々や既に社会で活躍している職人である受講生の方々のお話を、たくさん聞かせて頂いた事です。庭造りについての熱い気持や、造園業を営む上での心構え、庭造りの技術や知識に関する事など、たくさんの事を教えてくださいました。そのお話は私にとって、新鮮で、面白く、刺激になりました。この5年間の技塾で一番心に残っている事は、講師の方々や受講生の方々の、庭造りが好きで、楽しんで庭造りに取り組んでいる姿です。その姿はとても格好良く見えました。

山採りしたモミノキの搬出

実は、当時私は進路に迷っていましたが、この技塾で経験した事をきっかけに、私の進路は定まりました。

その後、技塾で出会った内田均教授の助言で東京農業大学の短期大学部に進学し、卒業した今年4月から造園の職に就くことができました。

5年間、庭の完成まで関わる事ができたのは、講師の方々、スタッフの方々、受講生の方々が温かく迎え入れてくれたおかげです。

このような庭造りに参加する機会を与えてくださり、有難うございました。

（会員子弟　東京都支部　東芳庭苑勤務）

北米日本庭園協会ハワイ地域研究会 他 国際活動の報告

山田　拓広

9月14日～17日まで、ハワイ島ヒロで開催された北米日本庭園協会の地域会議に参加いたしました。今回は石組と剪定のワークショップと、米国加州立大学ケン・ブラウン教授のご講演、キラウエア火山の雄大な自然風景の見学等の内容でした。

ハワイ島は火山やマウナケア山の天体観測所、コナのビーチなどが有名ですが、ヒロの街には、多くの日系人が住まわれています、戦前にはサトウキビ栽培の仕事などで14万人もの日本からの移民がいらっしゃったとのこと、それらの方々が伝え守られてきた日本の文化、風習が今も息づいています。

今回の会場であるリリウオカラニ公園は、ハワイ王国最後の王女の名前がつけられた公園で、ほぼ全体が日本庭園となっています。溶岩の地形を活かした潮入りの庭で、移民を送り出した各府県から贈られた燈籠が各所に配置されています。また裏千家から贈られた茶室「松浪庵」では、お茶の稽古が熱心に行われていました。

公園の一角で石組みの指導をする

ヒロの街はこれまで何度も津波に見舞われ、その都度復興を遂げてきました。この庭園も津波被害の痕跡が見られますが、庭園を管轄する州公園局、また庭園友の会のボランティアの皆さんが熱心に管理に取り組まれています。

ワークショップは地元のフレッド・ノナカ氏、デビッド・タムラ氏を中心に、日本から参加した私も含め、地元のライオンズクラブからのご協力を得て、四阿の横に新たに設置する石組作業をデモンストレーションとして行いました。2004年にシアトルで行われた、国際日本庭園シンポジウムの石組ワークショップを見てタムラ氏が感銘を受けて、ヒロでも是非行いたいとのことで実施されました。クレーンやミニバックホウも使っての作業でしたが、地元の造園関係者のご協力のもと、見学者には石を置く時の考え方、ポイントなども説明しながら、皆さん熱心に参加されていました。

今回は北米日本庭園協会の地域会議で参加者は全体で40名程と小規模でしたが、逆に参加者の接し方は密になるように思います。皆さんも機会があれば参加なさってみてはいかがでしょうか。

また10月にはインドネシア・ジャカルタへ伺う機会がありました。日本庭園がお好きで、ご自宅にも自身で日本庭園を造られているパイマン氏から、インドネシアで日本庭園のイベントを行ったり、協会を作れないだろうか、と問合せがあったためです。昨秋に三橋一夫国際活動委員長、本川勇氏が、そして今回は私が伺ったのですが、機会があれば協力して是非実現させたいものです。

9月にも英国日本庭園協会の総会へ伺う機会がありました。こちらは歴史ある組織で、日本庭園について本当に熱心に取り組んでいらっしゃる方々が100名程参加なさっていました。欧州では他にも日本庭園がお好きな方が庭園協会を組織されていると聞きます。それらがつながって、日本庭園文化の大きな流れが作れないだろうか、などと思ったりしています。

今年度より国土交通省による海外の日本庭園再生プロジェクトが始められました。10年程前に日本造園学会で調査したデータでは、海外に作られた日本庭園は、公共団体関係のものだけで世界に100カ国以上、500ヶ所を超えていました。最初に海外で作られた日本庭園は、1873年のウィーン万博のものと言われていますが、日本庭園は欧米の方々にも興味を持たれてきました。19世紀から20世紀初めには、万国博覧会において日本文化を紹介する一環として、商業施設のアミューズメントパークとして、植物園などでは池泉回遊式や枯山水などのテーマガーデンとして、また個人庭園、日系移民コミュニティで作られたものなどもあります。姉妹都市締結の記念として作られたものなど、経緯は様々ですが、どの庭園も日本文化、国際理解の交流使節としての役割を果たしてきたと言えるのではないでしょうか。けれどもその多くはメンテナンスに問題を抱え、これまでも多くの支援の要請が寄せられていました。今年度は日本造園組合連合会、日本造園建設業協会がこの事業に関わっています。私たちも海外からの要請にこたえられるよう努力していきたいものです。

石を据え終えて記念写真（中央左の白い服装が山田拓広氏

来年9月末から10月初旬にかけては、北米日本庭園協会の総会がポートランドで行われます。1996年に国際日本庭園シンポジウムの第1回大会が開催された場所です。あれから20年以上経ち、庭園も大きく発展してきているようです。是非この機会に多くの会員で参加したいと思います。どうぞ皆さんご予定ください。

（理事　国際活動委員）

平成29年度
支部活動報告
東京都支部／島根県支部

東京都支部
版築実践塾
①平成29年9月9日～10日
②平成29年9月16日～17日

新しい出会いに感謝

深津　将之（サマー）

版築実践塾のことは、庭園協会からのハガキで知りました。

「うわ～行きたいなぁ」と思いましたが、その日は地元の町会の用事があり無理だとあきらめていました。しかし「みんな行くから行きましょう」と伊久美造園さんが声をかけて下さったので焼津・藤枝から5人で町田に行きました。当日現場に行ってみると、たくさんの人が来ていました。そこには、長い型枠が組んであり、反対側にはすでに出来上がった版築塀がありました。これを造るのかと思うとワクワクしてきました。

田中徳夫塾長の挨拶から始まり

全国各地から参集した参加者達

ましたが、先生方の挨拶もそこそこに直ぐに作業がスタートしました。3つのグループに分かれ、自分は最初、突き作業でした。まず、土や消石灰、セメントなどが入ったネタを型枠の中に入れて均します。作業の注意点は周りとの高さを揃えることです。スタッフの池田功さんの掛け声で一斉に突き始めます。その繰り返しです。

ビーコンの周辺部は特に念入りに突きます。細かい注意点などは、作業しながら別のスタッフが教えてくれます。何セットか作業した後には交代で別の作業になります。

今度は土を練る作業をしてみました。始めは恐る恐る作業をしていました。間違いがあってはいけないと思うからです。そうすると先生がこちらに来て説明してくれました。

「そんなペースでやっていたら30人が遊んでしまうぞ」と、すると受講生に段々とスイッチが入っていく訳です。先生に「土の硬さはこれくらいですか」と聞くと「いちいち確認しなければいけないようではダメだろう。自分で触って手で感じて確認しなければ意味ないだろう」と返ってきます。続けて色々な話もしてくれました。

「版築のやり方というのはひと通り覚えれば誰でもできるようになるけれども、僕はね、そういうことよりもセメントを練る際の水の入れ方とか、どう工夫して作業を行うかとか、そういうことの方が大事だと思うんだよね」講師の仰る一言一言がごもっともな言葉でした。こんな感じの現場ですから自然と活気ある作業になっていきました。作業にも慣れ、人にも慣れて作業はバンバン進行していきました。

午後は先生方の講話からスタートしました。どの話も興味深かったですが、講師の豊蔵均さんが紹介してくれた左官職人の榎本新吉さんの言葉にはしびれました。

「今の人は基本を知らない。一から十を知らないから駄目ってんだ。だから百で止まっちゃうんだよ。俺達は一から十をやってるから、千でも万でも行くんだよ。今の職人は十から百なんだよ」

他にも素晴らしい言葉がいっぱいありました。もはや版築の勉強に来ていて、版築ではないんですね。先生方の伝えたいことが。講話の後は残りの作業に取り掛かりました。そして予定の版築の作業は無事終了しました。

2日目はいよいよ型枠外しです。外した時の歓声はちょっと弱かったですが、いい感じになったなぁと思いました。版築の洗い方の注意点

皆で心を合わせて土を突く

などは、何回も作業をしている故にと感じさせることばかりでした。ビーコンの穴埋めなどはデータを基にいい感じで仕上げるなぁと思いました。洗い出しの作業もあくまでも自分の感性が大事という事を実感しました。休憩時間や懇親会の時には、日頃の仕事の話をしましたが、皆さん素晴らしいお仕事をなさっていました。自分のしてきた仕事にガッカリする思いでした。でも出会えた故でのこの挫折と思って日々精進している次第であります。同じ釜の飯を食べたとは言えませんか?素晴らしい出会いに感謝するばかりです。本当にありがとうございました。またこれからも講習会に参加させて頂きます。

素晴らしい先生と仲間が待っていると確信しています。

（正会員　静岡県支部）

版築実践塾を通じて多くの事を学びました

茂庭　甲子

9月16日～17日の2日間に行われた「版築実践塾」に参加させていただきました。

はずかしながら「版築」という言葉自体初めて聞いた言葉で、これまで触れたこともなく（知らずに通り過ぎていたのかもしれません）事前に少し調べてから臨みましたが、初日の朝、既に出来上がっている箇所を実際に見て触れ、写真や文章だけでは伝わりきれない美しさに感動しました。

台風接近という天候もあり、座学は後半に行い実習からのスタート、土作りと、型枠に土を流し込み突き固める班に分かれて作業を行いました。

シンプルな作業ではありますが、時々の土の配合や水加減、投入する土の量の計測、層を綺麗に出すための突き加減等、経験を踏まえ要点も細かく教えていただき、2日目の型枠を外した際や洗い出しの際には、それらの部分がどの様に反映されているか実際に確認する事ができました。実習の際、印象的だったのは「あくまでこれはうちでやってきたこと、それぞれの考えや工夫は自由。まず自分でやってみて、沢山失敗すれば良い」という山際大地講師の言葉。それは本当にそうだなと。それがこの仕事の一番面白い部分なのかも知れません。それは後で、豊蔵均講師の座学で教えていただいた、左官職人の榎本新吉さんの言葉にリンクし、それがまた非常に面白かったです。また座学の際には、版築以外にも施工中の現場全体の説明を田中徳夫塾長にしていただき、自分が学ばなければいけない事は無限にある、という果てしなさを知ってしまいましたが、こうやって様々な方々のお話を聞いたり、経験を教えていただく事で、学ぶ事の楽しさも知りました。

この度は、貴重な機会を与えてくださり誠にありがとうございました。

これから定まるであろう造りたい物がつくれる様に、こうありたい者になれる様、素直に学び、試行錯誤と失敗を重ね日々精進していきたいと思います。

（会員子弟　岩手県　奥州造園勤務）

型枠をはずし仕上げの水洗いをする田中徳夫塾長

島根県支部

安諸定男　編笠門講習会

平成29年8月25日～27日

またもや課題を頂きました

本多　紀彦

私は新潟県長岡市で造園業を商いしております。独立して間もない頃、新潟県関川村の国指定重要文化財渡邉邸にて編笠門の講習会があり、参加して曲がった木材を加工する技術や木の組み方、基礎石への光付け、屋根の葺き方など、それに伴う道具の扱い方を学ばせて頂きました。その講習会がとても刺激的で、庭を造る者として大切な姿勢を学ぶ機会となり、編笠門が完成したときの感動が忘れられず、それ以後の仕事に大きな影響を頂きました。そんな出来事から四年後、今度は島根県で編笠門の講習会がある事を聞き付け、もう一度教えて頂けるチャンスと思い参加する事に致しました。講習会1日目、駐車場に着き会場まで向かう途中、トントントン、ダンダンダン、もうすでに始まっている音が聞こえてきます。私は足早に向かい受付をすませ会場に入りました。玄翁で竹を割る者、竹穂をさばく者、編笠門の木材を加工する者、いくつかの場所に分かれて仕事がすでに始まっていました。私もすぐに手を出し現場と一体になろうとしました。初対面の職人と一緒に、次々と仕事をしていく。作業を一緒にすることで、言葉では表現できないような繋がりが生まれ、作業が終わる頃には親近感を感じました。同じ職人、同じ庭師、言葉以上にここに居ること、それだけで通じ合える、面白い機会を与えて頂きました。桂垣、延段、三和土、編笠門、各現場で各地から集まった職人が指導の下、それぞれを造っていく。講習会2日目、3日目と技術的な事は勿論ですが、振り返ってみると、多くのことを体験させて頂きました。私がこの講習会に参加して一番心に残ったことは講師である安諸親方の言葉にあります。「みなさん自然をもっと観察してください」「昔の人は身近にある自然をよく観察して、その美しさを感じていたんです」「だから桂垣が造れたんです」またもや課題の残る貴重な講習会に参加することができました。準備をしてくださった皆様、技術指導してくださった皆様、ありがとうございました。

（正会員　新潟県支部）

ご縁に感謝

松葉　英太郎

8月25日～27日に島根県安来市奥野邸にて開催されました、日本庭園協会島根県支部主催の安諸定男親方による「編笠門・桂垣・延段実践講習会」に参加しました。

8月25日、日付が変わる頃に大阪を出発。当初参加者は30名程度と聞いていましたが最終的に倍の60名が参加との事、ワクワクした気持ちとちょっぴりのドキドキで現地へ車を走らせました。日の出の頃に安来市を通過、そのまま出雲大社へ。講習3日間の無事を祈願してきました。開始予定は9時から。30分前に講習会場へ到着。奥の方は何やら慌ただしい雰囲気。車を止め道具を降ろしていると島根県支部長の岡さんにお会いしご挨拶。開口一番「急いで！もう始まっているよ！」との事。一瞬で気持ちが引き締まりました。

左手前の安諸定男親方を囲んで会話がはずむ

会場内はすでに活気づき、皆さんの熱気は満ち溢れ作業が進んでいました。恥ずかしながら編笠門、桂垣どちらも経験がなく、少し戸惑いながらも皆さんと一緒に作業をさせて頂きました。そして、会場内をくまなく回っていらっしゃる安諸親方、写真でしかお目にかかっていなく、怖く厳しい方と勝手にイメージしていましたが、何事に対しても尊大になることは無く、丁寧にそして優しく指導して頂きました。大事な時は作業を止めて皆に説明して下さり、「これわかる～？」「みんなわかった～？」失礼な言い方かもしれませんが、少年の様なキラキラした眼差しが印象的でした。ピンと張りつめた空気を時折ジョークを交えた会話で和らげて下さり、その会話の中にも仕事に通じる学びがあり、私も親方として職人としてまだまだなんだと痛感させられました。作業はどんどん進み終わってみれば、飛石、三和土、竹ひしぎ垣などもやっていました。この3日間、皆さん黙々と、分からない事はお互いに聞き合い教え合い協力し合って、同じ目標に向かって一人一人が成長できた講習会だったと思います。技術は勿論の事ですが、私にとってはもっと大切なことを教えて頂いた講習会でした。島根県支部の皆様、参加者の皆様、そして安諸親方と山口造園の皆様、本当にありがとうございました。ここで学んだ事を忘れず、日々精進していきたいと思います。あらためて、ご縁に感謝。（一般参加）

編笠門の屋根部分に取り組む

尻込みしてしまう気持ちに打ち勝って生きなさい

持田　めぐみ

「何をしていいかわからない！」奥野邸の庭に入った瞬間、たくさんの人の熱気にあてられポカーンと立ち尽くしました。すぐに島根県支部長の岡さんが寄ってきてくださって、とにかくどこでもいいから何かをやりなさいと言われ、竹ひしぎを作っているスペースに入らせてもらいました。

講習会に参加した理由は、雑誌で見た安諸親方が実際に島根に来ると聞いたからです。そんなすごいこと一生に一回も無いかも知れないと、何にも庭のことなど解らない中、勇気を出して参加させて頂きました。竹ひしぎを作ったことが無いどころではなく、ノミすらも握ったことが無かったので使い方も解らず、今思えば周りの方々には大変なご迷惑をかけてしまったなと思います。けれどその時はパニック状態で周りの事も考えられず、ひたすら、どうしたらいいですか、と聞き続けていました。そんな危なっかしい私を、親方を始めたくさんの方が勇気づけてくれ、色んな事に挑戦することが出来ました。中でも、門の袖垣の柱の一本をさせてもらえたのは本当に貴重な体験でした。光付けもほぞ穴も初めて、電動カンナも使い方が解らない、そんな状態でいろんな人の力を借りたとはいえ、よくできたなと思いました。たくさん失敗もしました。切らなきゃいけないところが切れてなかったり、逆に切ってはダメなところに切れ込みを入れてしまったり。それでも、向かわせていただけた事、やり切らせていただけたこと、終わった時にその柱が立っているのを見て失敗した事への罪悪感と、やれたぞという気持ちと、色んな気持ちがくすぶって、そのくすぶりをこれからに活かしたいと感じました。とにかく手を出してみる、やってみる。簡単なようで尻込みしてしまうそんな気持ちに打ち勝って生きなさいと、教えていただいた様な気がしています。（支部会員）

完成した編笠門と周辺

本部からのお知らせ
清澄庭園再評価プロジェクト　連続講演会

江東区清澄3丁目にある清澄庭園は、昭和7年（1932年）7月24日に開園され（開園面積37,434.32平米）、昭和54年（1979年）3月31日に東京都の名勝に指定されています。

この庭園は、明治11年（1878年）、岩崎彌太郎が、荒廃していた大名庭園を買い取り、改修を行い、明治13年に社員の慰安や貴賓を招待する場所として「深川親睦園」として命名した由緒ある庭園です。

大正12年（1923年）の関東大震災で庭園は壊滅的な被害を受け、邸宅も焼失しました。この状況の中で東京市の公園課長井下清の働きかけにより、大正13年（1924年）、3代目社長の岩崎久彌は庭園の東半分を市に寄贈しました。東京市は大正記念館の移築（1929年5月竣工）など再整備を行い、市の庭園として開園しました。

日本庭園協会は公益団体として今日まで文化財庭園の保護や保存を行うなど社会的責務を果たしてきました。来年、日本庭園協会設立100周年を迎えるにあたり、開園からすでに85年が経過して東京を代表する庭園として定着している清澄庭園の価値を再評価し、文化財庭園としての評価を社会に問うプロジェクトを記念事業の一環として実施することとしました。

プロジェクトとして連続講演会を企画し、第1回講演会は発案者であります龍居竹之介名誉会長の「清澄庭園の魅力をさぐる～近代庭園の原点」としてすでに実施していますが、次回以降の講演会についてお知らせします。

会場…清澄庭園大正記念館
参加費…各回2,000円
申込先…（一社）日本庭園協会へ電話で申し込む。当日受付も可能
主催者…（一社）日本庭園協会
後援…（公財）東京都公園協会（予定）
協力…文化財指定庭園保護協議会（予定）

■ 講演内容

開催日	題名（仮）	講演者
平成30年1月14日（日）	岩崎家と清澄庭園	原徳三 静嘉堂文庫美術館元参与
平成30年1月21日（日）	涼亭の文化財的評価	内田清蔵 神奈川大学教授
平成30年2月3日（土）	清澄庭園と名石	松島義章 神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員
未定	名勝としての価値	亀山章 東京農工大学名誉教授
平成30年4月8日（日）	清澄庭園の魅力をさぐる2	龍居竹之介名誉会長

編集委員コラム

木になる葉なし 8

加藤　精一

煎茶の中興の祖と言われる高遊外売茶翁は、のびた髭に普段着のままで、茶道具を担って、洛中の風光明媚なところに出でて、煎茶を立ち売りするといった風変わりな生活を57歳で始めました。葉隠武士で知られる鍋島藩の武士の家で延宝3年（1675）に生まれ、その風土に培われた厳しい性格を持って育ちました。

11歳で、黄檗山竜律寺（鍋島藩の菩提寺）に入り、22歳の時には、大病に苦しみ生死をさまよい、自身の修行の足りなさを恥じて、諸国行脚の旅に出ます。湛堂律師に律を学び、筑紫では雷山の峰で苦行に励んだ。禅の修行に修行を重ねた翁は、57歳の時、師の化霖入寂後、竜律寺を、法弟の大潮に任せ、還俗し京都に上洛したのです。

翁は茶席に「茶銭は黄金百鎰より半文銭迄は　くれ次第　ただ飲みも勝手　ただよりはまけ申さず」と張り出して竹筒に銭入れをかけ、客の思うがままにお代を投げ込めるようにしていました。洛陽の人々は、折々に焚く柴の煙に立ち寄って、釜の松韻を喜び、その噂は京洛の内外のみならず、各地にも伝えられて「この一盞を啜らねば、雅人にあらず。」といわれるまでに評判になった。

その時の心境について「僧の処世のあり方が正しいとか間違っているとかいうのは、全く心のあり方によるものであって、その形にあるものではない。僧侶であることをよいことに、信者のほどこしのみ頼るような生き方は私のいさぎよしとするところではない。」又「少なくとも自分がどんなことに出会ってもその場その場に応じて物事を処理する能力あらば、世の中に出て行って指導するということをしてもよい。まだそれ程の能力もないのに、ただ少し学問を修めたからとか、少し上の地位についたからといって、自慢げに先生顔をするのは私の心から恥とするところである。」とも言っています。

翁は茶を売ることで生計を立てようということでなく、一服の茶の裡に禅味を養うのが目的でした。この様な売茶翁の煎茶に、学者、画人、商人、工人の区別なく親しく往来していました。最近あちこちで大規模な展覧会が催されていて大人気の絵師、伊藤若冲も売茶翁を人生の師と仰いだ一人でした。現代では茶の庭と言うと抹茶と露地を連想しますが、自然との一体感を大切にした煎茶と庭の関係はより一層親密であったのではないでしょうか。明治期の文人趣味好事家や古美術商等が大規模な煎茶会を催し、そこに集まった風流人が知的会話を楽しみ、政治的、経済的、文化的リーダーの彼らが当時の社会に大きな影響を及ぼしました。売茶翁をきっかけに煎茶の世界を垣間見てみました。

伊藤若冲が描いた唯一の肖像画　売茶翁

庭園協会ニュース89号　訂正

庭園協会ニュース第89号15ページ写真の人物名が違っていました。正しくは左からコリンさん、沢口さん、増田さんでした。申し訳ありませんでした。

アンケート調査へのご協力願い

日本庭園協会は平成30年に創立一〇〇周年を迎えるにあたり、会員それぞれが考える「私にとっての庭」「思い出に残る庭」「先人に学んだ庭のあれこれ」「これからの庭」他について、ご提案、ご意見をいただきたくアンケート調査を企画いたしました。調査結果は、「創立一〇〇周年記念誌」に掲載する予定です。

アンケート調査票は、12月中旬を目処に、皆様へ郵送させていただきます。年末年始のお忙しい時期ではありますが、平成30年1月末までにご回答をお寄せくださいますよう、ご協力をお願いいたします。

創立一〇〇周年記念誌出版委員会